

第2群の座長をつとめて

坂井 恵子

(石川県立総合看護専門学校)

第2群の研究発表の座長をつとめさせて頂きました。演題4題は事例研究・質的研究で、焦点はがん患者あるいは難治性疾患と看護援助でした。いずれも看護実践現場での問題性があり、貴重で意義深い知見を得られました。

第1席「再発を繰り返し外来で治療を受けた患者への看護介入の一考察」(酒井しのぶさん)は、がんで外来治療をされる男性に対して、長くつらい状況を共に悩み最期まで関わった事例です。外来看護の役割は、関係性の上に精神的安楽の提供であると結論づけられました。会場から、対象の気持ちの整理や安楽の確保は、看護師のどの介入によるものか質問があり、多大なデータに潜む看護の技の抽象化について必要性を感じました。

第2席「病状の進行によって感情を乱すがん患者への看護師の対応の指針」(山下美樹さん)は、進行性がん患者への関わりを振り返り研究とされたものです。対象の認識に働きかけることと快の刺激の提供の示唆が得られました。研究目的は看護師の指針を探ることですが、実際には患者が前向きに変化された2場面を再構成されていました。講評の先生からは、うまくいかなかった場面も取り上げるとさらに掘り下げられるとご指摘がありました。ターミナル期の奥深いケアを今後とも継続して追究して頂きたいと思いました。

第3群「ターミナルステージの患者に接する看護師の思い」(尾西恵理さん)は、看護師に焦点をあて、半構成的面接法でデータ収集がなされま

した。ターミナルケアにおける葛藤という概念にはユニークさを感じました。看護師の認識は、看護者自身の対象のみつめ方や専門性に左右され、とりわけ対象の生き方に関わるターミナルケアは看護師の力量によります。対象の選定条件や面接法について質問がありましたが、もっと討議を深められたらと残念でした。本研究の継続・発展を強く願うものです。

第4群「レミケード治療における看護の方向性の検討」(山口まり子さん)は、関節リウマチ患者11名の方に面接され、多大なデータ収集・分析から共通する心理と心理変化を見出されました。カテゴリとされた医療者への信頼、合併症予防への思い、投与方法による苦痛等を明らかにすることで、次の具体的援助の提言に繋がります。研究の醍醐味を思いました。

今回の研究発表は興味深いものばかりであり、皆様から質問・意見もありましたが、討議時間が不十分で申し訳なく思っております。また研究者の思いをもっと引き出す必要性がありました。

石川看護研究会学術集会は今回で最後でした。22年間に渡る活動で、着実に研究の力をつけ、看護現場での活用を実感致しました。研究に取り組まれました皆様、ご参加および関係各位の方々の今後のご活躍をお祈り致しますと共に、この機会を頂きましたことを感謝申し上げます。ありがとうございました。

第3群の座長をつとめて

森 智子

(石川県済生会金沢病院)

第22回石川看護研究会学術集会において、第3群の座長を勤めさせて頂きました。第3群は、看護現場ならびに教育現場における管理・教育をテーマとした調査研究でした。まさに、本研究会の「看護の実務ならびに教育に関する諸問題について研究し、その発展に寄与すること」という目

的にふさわしい内容でありました。

第1席、小松市民病院の山悦子さんの発表は、K病院作成のクリニカルラダーを導入して評価時の現状を明らかにし、今後の課題を探る目的で取り組まれた研究でした。目標とする看護師像を見失わず、クリニカルラダーは成長のためのツール

であり、そのための評価であることを再認識しました。今回得られた結果を活かし、クリニカルラダーの目的を踏まえた客観的・公正・公平な評価基準の改善を行い、教育実践につないで行かれるのではないかと思います。

第2席、山中温泉医療センターの米澤絵理さんの発表は、看護体制10対1の三交代制、急性期混合病棟において固定チームナーシングを基盤として看護実践してきた中での問題から、モジュール型継続受持方式導入を行い、プライマリーナースとしての役割が発揮できる環境作りが行えたという内容の研究でした。質疑応答では、「看護の中身はどのように変わったか」「カンファレンスの内容は」など論議されました。在院日数の短縮という厳しい医療情勢の中で、現場が抱える様々な問題を直視し、より質の高い看護を目指して取り組まれた研究は、他施設にも共感でき参考になったことと思います。

第3席、金沢大学医学部附属病院の津田千香子さんの発表は、先行研究を活かし実践しても同様のインシデントが起こる要因としてヒューマンエラーが関わっていることに着目し、注射に焦点をあてインシデント発生時の個人の心理的要因を明らかにする目的で取り組まれた研究でした。結果からは、心理的要因と心理状態に影響した要因が導き出されました。今後、研究結果が、患者や医療従事者にとって安全で安心した環境作りに活かされることを期待します。

第4席、石川県立総合看護専門学校の北崎直美さんの発表は、看護師養成機関における男子学生

のジェンダー意識に関する内容でした。結果から①教員の男子学生に対するジェンダー意識は管理者が高い傾向にあり、その要因に年齢が影響していること②男子学生に対する講義への配慮をしている教員は全体の19.2%であったこと③講義への配慮の有無とジェンダー意識とに関連はなかったこと④講義への配慮をしている教員は母性看護担当者が多かったことが明らかとなりました。今回の結果が、教育現場にどのように反映されるのかが期待されます。第4報として発展的な研究となることを信じております。

第5席、石川社会保険事務局の木下幸子さんの発表は、提供したい看護と現実の看護を看護管理者が質問紙に回答し、その現状を検討したものでした。今回の研究から、看護管理者は、提供したい看護と現実の看護とのほごまで苦悩しているという実情を知ることが出来ました。そして、このような厳しい変革の時代である時こそ、看護の力を強化し社会の期待に応えることが必要であると言われており、看護管理者のあり方について深く考えさせられました。

座長としては、質疑応答の時間が短く、質問数を制限したため有意義な討論の場がつかれず、また研究者と会場の皆様との橋渡し役として力不足だったことをお詫びいたします。

最後に、研究者の皆様のご努力に敬意を表し、今後のご活躍を心よりお祈りしております。また座長としての機会をいただきましたことに感謝いたします。